

第 46 章

3 ニーファイ 27 - 30 章

はじめに

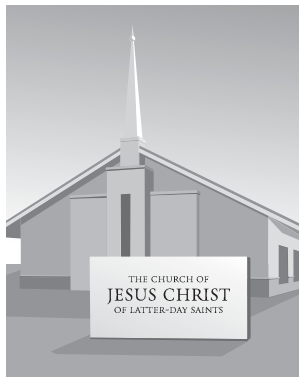
ニーファイ人に対する教導の業が間もなく終わろうとするとき、救い主は御自分の福音を構成するものについて説明された。3 ニーファイ 27 - 30 章の範囲にはまた、身を変えられた者（3 人のニーファイ人の弟子）について聖文のほかのどの箇所よりも多くのことが記されている。主は死すべき状態にある御自分の弟子のある者についてその身を変えることを選ばれるが、28 章を研究することによって、その理由について理解が深まるだろう。最後に、第三ニーファイは末日のイスラエルの集合におけるモルモン書の役割について述べたモルモンの言葉と、主が（モルモンを通して）末日の異邦人に与えておられる、悔い改めて主に立ち返るようという警告で結ばれている。この箇所を学ぶことは、自分の生活の中で、また救い主のもとに来るように人々を招く際に、モルモン書を用いようという決意を新たにする良い機会である。

注解

3 ニーファイ 27:3 - 8 「この教会をどのような名で呼ぶべきか」

・イエス・キリストの教会の会員になるとき、この教会は主の教会であるから、わたしたちは主の御名を受ける。ゴードン・B・シンクレア大管長（1910 - 2008 年）は大管長として最初の大会で行った説教の中で、教会と教会の名前と教会が負っている責任との神聖なつながりについて次のように語っている。

「この教会は大管長のものではありません。この教会のかしら頭は主イエス・キリストです。わたしたちは一人一人が、その御名を受けています。わたしたちは皆、この偉大な御業とともに携わっています。わたしたちは、天の御父の御業と栄光である『人の不死不滅と永遠の命をもたらす』ための働きの中で、天の御父の助け手となるために召されているのです（モーセ 1:39）。皆さんの受けている責任も、わたしの受けている責任も、その重要性に変わりはありません。この教会に、小さな召しか、つまらない召しなどはありません。わたしたちは皆、責任を果たしていく中で、人々の生活に影響を及ぼすのです。主はわたしたち一人一人に、その責任について次のように言われました。



『それゆえ、忠実でありなさい。わたしがあなたを任命した職において務めなさい。弱い者を助け、垂れている手を上げ、弱くなったひざを強めなさい。』（教義と聖約 81:5）

『これらのことを行うことによって、あなたは同胞に最も大いなる善を行い、またあなたの主である者の栄光を増すであろう。』（教義と聖約 81:4）」（『聖徒の道』1995 年 7 月号、76）

・十二使徒定員会のジェームズ・E・タルメージ長老（1862 - 1933 年）は、主の教会をどのような名で呼ぶべきかという質問に答える際に主が用いられた論理について次のように述べている。「皆さんはキリストがこの大陸の先住民の間で御自分の教会を設立された後の出来事を覚えているでしょう。復活した御方として民の中に御自身を現し、教会の諸事を導く 12 人を選んで聖任した後、教会に付けるべき名前について多少の論争がありました。十二弟子は、心と目的を一つにして主を呼び求めるときには必ず聞いていただけるとい主の恵み深い約束を思い起こし、断食して祈りました。すると、評議会を開いていた彼らに主が再び御姿を現し、彼らの望みを尋ねられました。弟子たちは言いました。『主よ、この教会をどのような名で呼ぶべきか、わたしたちにお教えいただきたいと存じます。』主の答えは、現代ふうの話し方で表現すると次のような内容でした。『なぜそのような簡単な問題について質問があるのか。この教会はだれの教会か。モーセの教会か。もしそうであるなら、当然、モーセの名で呼びなさい。もしほかのだれかの教会であるなら、その人の名で呼びなさい。しかし、もしあなたがたの言うように、そして実際にそうであるように、わたしの教会であるなら、わたしの名で呼びなさい。』（Conference Report, 1922 年 4 月、70）

3 ニーファイ 27:5 - 6 「キリストの名を受け〔る〕」

・十二使徒定員会のロバート・D・ヘイルズ長老は、キリストの名と従順の律法を引き受けることと聖霊を伴侶とするという祝福を受けることとの関係について、次のように説明している。

「バプテスマを受けるとき、わたしたちはイエス・キリストの聖なる御名を受けます。主の御名を受けることは、人生における最も重要な経験の一つです。しかし、十分理解しないまま、バプテスマを受けてしまう場合があります。

わたしたちの子供の何人が、そしてわたしたちの何人が、自分はバプテスマを受けたときにキリストの御名だけでなく従順の律法も引き受けたということをほんとうに理解しているでしょうか。



わたしたちは毎週^{せいしん}聖餐会でバプテスマの聖約^{あがな}を新たにすると、救い主の贖いの犠牲を覚えることを約束します。救い主の模範に従うこと、すなわち御父に従順になり、いつも神の戒めを守ることを約束します。それによって、いつも御子の御霊^{みたま}を受けるという祝福を得ることができます。」

(『リアホナ』2001年1月号, 8)

3 ニーファイ 27:13 - 21

主は御自分の福音を構成する中心的な要素として何を挙げておられるか。

3 ニーファイ 27:13 - 22 「わたしがあなたがたに告げた福音とは、次のとおりである」

・十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老（1926 - 2004 年）は、福音が簡潔であるがゆえに、ある人々は福音を非常に受け入れ難いものと感じると教えている。

「モルモン書の中には、主が『見よ、わたしがあなたがたに告げた福音とは、次のとおりである』と言い、その後、御自分の福音について説明しておられる箇所があります（3 ニーファイ 27:13 - 18 参照）。それは、世に救い主が遣わされ、人はその御方を受け入れることも拒むこともできるが、それでもなお、その御方はメシヤであられる、ということについての簡潔な物語です。

その簡潔な物語こそ、言うまでもなく、世には受け入れることのできないものであり、非常に簡潔であることから、時にいわゆる福音の簡潔さのために心の中に不快感を抱く人すらいます。……

……わたしたちの信条や価値観を部分的に共有している人もいますが、そのような人にとって、福音の回復は乗り越えることができないつまずきの石となっています。しかし人類の大半にとっては、わたしたちが宣言していることは『愚かなもの』なのです。」(For the Power Is in Them [1970 年], 47 - 48)

救い主御自身が、主の福音とは信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊（3 ニーファイ 27:19 - 20 参照）、そして最後まで堪え忍ぶこと（16 節参照）であることを明らかにしておられ

る。主はまた、福音とは主が御父の御心^{みこころ}を行うため、そして「十字架に上げられる」ために世に来たことであると述べられた（13 - 14 節）。

3 ニーファイ 27:24 - 26 主は数々の書によって世を裁かれる

・「これまで書き記されてきた数々の書と、これから書き記される数々の書によって、この民は裁かれるであろう。これらの書によって彼らの行いが人々に知られるからである。

また見よ、すべてのことは父によって書き記されている。」（3 ニーファイ 27:25 - 26）

ジョセフ・F・スミス大管長（1838 - 1918 年）は、書き記された記録が裁きにおいて果たす役割を次のように明らかにしている。

「主も記録を作られ、全世界はその記録によって裁かれるだろう。そしてあなたがた神権を持つ者——使徒、ステーク会長、ビショップ、シオンの大祭司——は、人々の判士となるように求められるだろう。したがってあなたがたは、人々の従うべき模範を示し、人々が福音の精神に添って生活し、義務を果たすように、また主の戒めを守るように配慮しなければならない。あなたがたは彼らの行動を記録しなければならない。人々がバプテスマを受けたとき、確認を受けたとき、また按手によって聖霊を受けたとき、あなたがたは記録しなければならない。人々がシオンに来るとき、彼らが会員になったとき、あなたがたは記録しなければならない。人々が、祭司として、教師、執事、あるいは長老、七十人、大祭司として義務を果たしているかどうか記録しなければならない。主が言われるように人々の業を書かなければならない。人々の什分の一を記録し……なければならない。人々が自分で認めた事柄と、あなたがたが認めた事柄の間の相違は、主が決められる。……まず、人々に義務を果たすように求めた後、わたしたちは人々を裁くことになるだろう。そのために、頭に立つ者は模範を示さなければならない。」(Gospel Doctrine, 第 5 版 [1939 年], 157)

3 ニーファイ 27:27 「あなたがたはどのような人物であるべきか」

・七十人のジョン・M・マドセン長老は、主が御自分のようになるように教えた際に用いられた「べき」という言葉に特に注目している。この主の言葉は単なる勧め以上のものであり、わたしたちの聖約の中で求められていることであると、マドセン長老は述べている。

「主を受け入れ、主を知るためには、わたしたち全人類はモロナイが勧めるように『キリストのもとに来て、キリスト

によって完全に』ならなければなりません(モロナイ 10:32, 強調付加)。言い換えれば、キリストのみもとに来て、キリストに似た者と『なる』ように努めなければなりません(ダリン・H・オックス「主の望まれる者となるというチャレンジ」『リアホナ』2001年1月号, 40 - 43 参照)。

復活された主は言われました。『あなたがたはどのような人物であるべきか。まことに、あなたがたに言う。わたしのようでなければならない。』

(3 ニーファイ 27:27)『わたしのようでなければならない』という主の答えを理解するには、『あなたがたはどのような人物であるべきか』という主の問いかけで使われている『べき』[訳注——英語では ought] という言葉の意味がきわめて重要になります。『べき』という言葉は『必要である』, あるいは『責任や道徳的義務がある』という意味であり (Noah Webster's First Edition of an American Dictionary of the English Language, 第7版 [1993年], “ought” の項。ルカ 24:26 も参照), 古代と現代の聖文が裏書きしているように次のことを示唆しています。つまり、わたしたちは主が『わたしのようでなければならない』と宣言されたような人物に『なる』『必要』があり、聖約によってそのようになる『義務がある』のです (3 ニーファイ 27:27。3 ニーファイ 12:48; マタイ 5:48; 1ヨハネ 3:2; モロナイ 7:48 も参照)。(『リアホナ』2002年7月号, 88)



ハリヤー・アーン・ターソン, © RRI

3 ニーファイ 28:1 - 6 ^{まな}愛弟子ヨハネの望みと務め

・預言者ジョセフ・スミス (1805 - 1844 年) とオリバー・カウドリは、肉体にとどまりたいと願ったヨハネの状況とその後彼が受けた祝福に関して、ウリムとトンミムによって具体的な啓示を受けた。この知識は、ヨハネが記して自ら隠し、失われたと思われる「羊皮紙」からのものであった。1829年4月、ジョセフとオリバーが特にモルモン書のこの箇所について尋ねたところ、教義と聖約7章の啓示が与えられた。

3 ニーファイ 28:9 - 10, 36 - 40 身を変えられることについての教義

・以下の定義は、身を変えられること、^{へんぼう}変貌、復活のそれぞれの教義を明確にするのに役立つ。身を変えられた人と、より一時的な状態である変貌との違いに注意する。

身を変えられた人「復活して不死不滅となるまで、痛みや死を味わうことがないように体の状態を変えられた人。」(『聖句ガイド』「身を変えられた人」)

「多くの人は、身を変えられるということは、それによって人々が直ちに神のもとに取り上げられ、永遠の無上完全に入ることでありと考えている。しかし、これは誤った考えである。彼らの住む場所は、月の栄えの秩序の場所であって、多くの惑星で仕える天使となるよう定められた人々のために神が備えられた場所なのだ。彼らは、死者の中から復活した人々のような大いなる無上完全にはまだ入っていない。」(ジョセフ・スミス, *History of the Church*, 第4巻, 210)

変貌「天におられる御方の臨在や栄光に堪えられるように外見や肉体の性質が一時的に変えられた人の状態。つまり、霊的に高い水準に変えられた状態。」(『聖句ガイド』「変貌」)

復活「死後、霊体と骨肉の体が再び結合すること。復活後は、霊と肉体は決して再び分離することがなく、人は不死不滅となる。」(『聖句ガイド』「復活」)

3 ニーファイ 29:1 - 4 イスラエルの子らとの聖約

・十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、イスラエルに関する神の聖約が果たされる中でモルモン書が担う役割について次のように書いている。

「モルモンはこの厳かな期間〔ニーファイ人の中への救い主の訪れ〕^{あかし}についての記述を……次のような証で結んでいる。すなわち、〔イエス・キリストの〕訪れについての記録が(モルモン書という形で)異邦人にもたらされるとき、終わりの時のイスラエルに対する聖約と約束が『すでに果たされ始めている』ことをすべての人が知るであろう、という証である。……

神の聖約はそのすべての聖約の民に対して守られる。だれもこの件について『主の右手を左手に変える』[3 ニーファイ 29:9] ことはできないであろう。そして異邦人にも同じ聖約と約束が及ぶように、彼らに対する呼びかけがなされており、モルモン書の中で明らかにされているキリストのニーファイ人への訪れは、末日における異邦人への究極の宣言なのである。」(*Christ and the New Covenant* [1997年], 308)

3 ニーファイ 29:4-7

モルモンは主の末日の啓示を拒む人々が取る行動を
どのような言葉で表現しているか。
彼らはどのような罰を受けるか。

3 ニーファイ 29:4-8 主の御言葉をはねつけてはならない

• 3 ニーファイ 29 章では、末日にモルモン書を読む人々に主のイスラエルに対する聖約を軽々しく扱わないように警告する際、「はねつける」および「あざける」という言葉が用いられている。「はねつける」(訳注——英語では spurn) とは、「蔑視して拒む」ことであり、「あざける」(訳注——英語では hiss) とは「シーツと言って軽蔑や不同意を表す」ことである (Noah Webster's First Edition of an American Dictionary of the English Language, 1828 [1967 年])。このような言葉が用いられていることは、モルモン書が世に出る時代には、再臨が現実であることについてもイスラエル (特にユダの部族) を集める主の業についても、人々は明らかに理解せず、信じず、畏敬の念を示さないということを示唆している。

3 ニーファイ 30:2 あなたがたの悪い行いを離れなさい

• 救い主がニーファイ人を訪れられたことについての話を結ぶに当たって、モルモンは主が民の中で教えられた事柄の主要なテーマの一つに戻り、終わりの時に異邦人が主の教えを拒み、滅亡に至るまで急激に悪事にふけるようになることについて述べた (3 ニーファイ 16:10; 21:14-21 参照)。3 ニーファイに書かれている事柄は、モルモンに大きな影響を与えていたように思われる。自分の最後の証の中で、モル

モンは終わりの時の邪悪でよこしまな者と汚れた者と偽善者を非難する救い主の教えと預言を再び採り上げている。3 ニーファイの最後の数節で、モルモンはそのような滅亡をもたらす状況に対する唯一の矯正手段を提示している。すなわち、イエス・キリストのもとに来て主を信じる信仰を持ち、罪を悔い改め、バプテスマを受け、聖霊に満たされて、「イスラエルの家に属するわたしの民とともに数えられる」ようになることである (3 ニーファイ 30:2)。

理解を深めるために

- イエス・キリストの教会が救い主の御名で呼ばれることが重要なのはなぜだろうか。
- どうすればもっと完全に救い主の御名を受けることができるだろうか。
- 身を変えられることと変貌はどのような点で異なっているだろうか。どのような点で似ているだろうか。身を変えられることと変貌はどのような点で復活と異なっているだろうか。
- モルモンは幾つかの邪悪な道を明らかにしている。それらは今日の世の中においてどのような形で現れているだろうか。

割り当ての提案

- 救い主の特質の中で特に重要だと思うものを幾つか挙げる。これらの特質に関して自分自身の生活を振り返り、「わたしのようでなければならない」(3 ニーファイ 27:27) と主が命じられたことをさらによく果たすための計画を立てる。
- 3 ニーファイ 27:5 および聖餐の祈り (モロナイ 4:3; 5:2) を読む。述べられている事柄から、キリストの名を受けることの意味を理解するのに役立つ原則を見つける。